

# 津博

TSUHAKU

2022.11 No.114

## 資料紹介

- 考古資料この一点⑤  
—長畝山北遺跡の流水文が描かれた鉢形土器—  
小郷 利幸

## トピックス

- 特別展記念講演会開催
- 三市交流展
- 学芸員実習・中学生の職場体験
- 勝北中学校での出前授業
- 文化財めぐり

## お知らせ

- 今後の展示予定



Tsuyama City Museum

津山郷土博物館

# 考古資料この一点⑤

ながうねやまきた  
 長畝山北遺跡の流水文が描かれた鉢形土器 — 小郷利幸

## はじめに

津山郷土博物館弥生時代の展示コーナーに、把手のついた変わった形の土器がある(写真1)。あまり見ない器形であるが、把手の付いた鉢形土器に

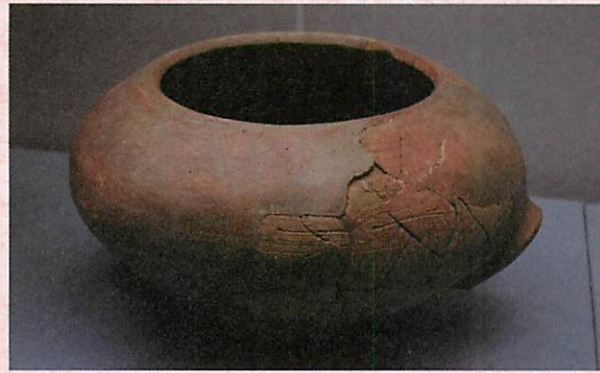


写真1 把手付き鉢形土器

分類される。さらに外面上部をよく見ると流水文と呼ばれる文様がきれいに描かれている。土器に流水文が描かれたものは美作地域でも珍しく、今回初めて展示されるので紹介する。

## 資料紹介

本土器は、市内国分寺の長畝山北古墳群の発掘調査で出土した(註1)。調査は平成2年に民間の宅地造成工事に伴い9基の古墳が調査された。それらの下層から弥生時代の集落遺跡(長畝山北遺跡、図1左)が

検出された。弥生時代の遺構は、住居跡6軒、建物跡1軒、土壇3基などからなる。

本土器はそのうちの土壇1(SK1、図1右)から出土した。本土壇は、長辺2.1m、短辺1.28m、深さ0.5mの長方形で、内部から壺・甕・高杯などと一緒に出土し、完形ではなかったので復元され、口径10.8cm、最大径36.6cm、高さ22.8cmを測る。胴部の肩が張った形のやや扁平な鉢で、肩よりやや下側に逆U字形の把手が2個つく。胴部外面下半にはヨコ方向とタテ方向のへらミガキが施され、上半には流水文を描いている(図2-1、図3-1)。流水文はまず最初に5条ほどの櫛状の工具で、間隔をあけて縦に線を引き(図3-1①)、さらに上下に横の線をめぐらせ(同②)まず長方形の区画を作り、その中を流水文(同③)で充填している。また、流水文は左側から書き始めて右側で終わるのが基本のようであり、左で終わる場合もある。見た限りでは、比較的流ちように描いているようにも見える。さらに外面には赤色顔料が塗布されている。出土した土壇は、土器片が多いことからそれらを廃棄した土壇と考えられ、集落のはずれに位置している。時期は出土した他の土器から、弥生時代の後期前半頃である。

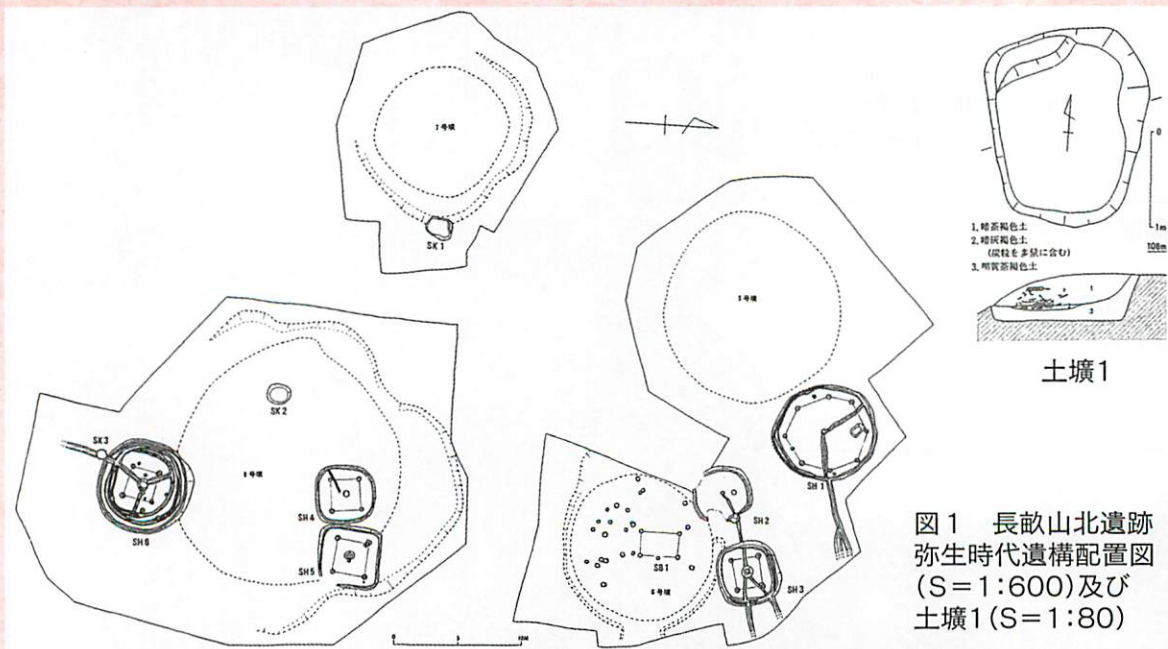


図1 長畝山北遺跡弥生時代遺構配置図(S=1:600)及び土壇1(S=1:80)

把手付き鉢形土器について(図2)

本例のような把手付き鉢形土器について類例を見てみると、津山市内など美作地域でも知られている。本例近くでは一貫東遺跡(図2-2、註2)に3例ほど見られるが、いずれもくの字に屈曲する口縁をもち、肩が張らず把手も口縁に近い位置に付けるタイプであり、本例とはプロポーションが大きく異なる。その内図示した図2-2は土器棺として使用されている。同一3は有本遺跡出土(註3)で、口縁の屈曲は無いが肩の張らないタイプである。これは土器棺の蓋に使用されたものである。その他の類例も勝央町小中遺跡の住居からの出土(同一4、註4)は、肩が張るものの口縁の屈曲がある。

以上、ほとんどが屈曲する口縁があり、本例と同じプロポーションのものは、今のところ美作地域では散見されない。ただ時期的には、ほとんどが後期前半頃であり、土器棺の例もある事から、把手付きの鉢形土器は、特殊な用途の土器として、後期の前半頃を中心に製作されたものが多いようである。

流水文を描く土器と銅鐸について(図3)

本例にはさらに流水文が見られる。調査報告書の中で流水文は中期の近畿地方特有の文様(図3-3、註5)であること、さらに銅鐸との関係について触れられ、流水

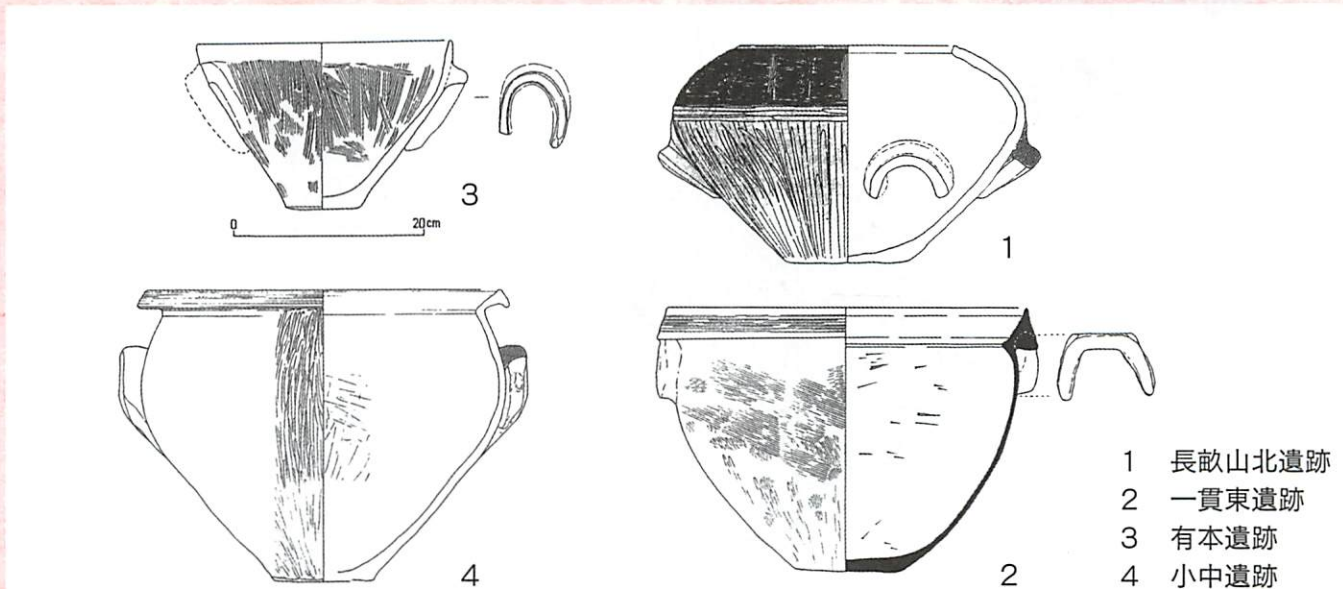


図2 美作地域の把手付き鉢形土器 (S = 1 : 8)

文を施した銅鐸を見聞きした人が描いた可能性や赤色に塗られていることからすると、特殊な意味合いがある土器であるとまとめられている。

本例(同一1)は区画内で流水文は完結するようである。描き方を細かく見ると、5条ほどのくし状工具で、湾曲部分を左右交互に連続させて描いている。上部から描いたとすると、各区画とも最初は左から右の順で描きはじめている。区画幅に差があるため、湾曲までのスパンに長短がある。このような流水文を縦型流水文(註6)と言う。これ以外に横型や複合型などがある。

非常によく似たものとしては、兵庫県尼崎市田能遺跡(同一4、註7)のものがある。上(下は不明)左右の区画などとてもよく似ている。ただ流水文の書き始めは右の湾曲部分からのものである。ただ拓本のため、器種の特定はできていないが時期は中期の中葉頃で本例よりは古い。文様構成がまったく同じであるので、本例も畿内からの搬入品の可能性も捨てきれない。ただ、畿内に本例と同型の鉢はほとんど知られておらず、搬入品でなくても、畿内のもとの同一の描き方から、畿内の影響を受けている事は間違いないだろう。

美作地域で流水文によく似た文様を描いた土器片が、鏡野町松木林遺跡(同一2、註8)で出土している。小片で実見していないため、器種や文様の全体像、時期など

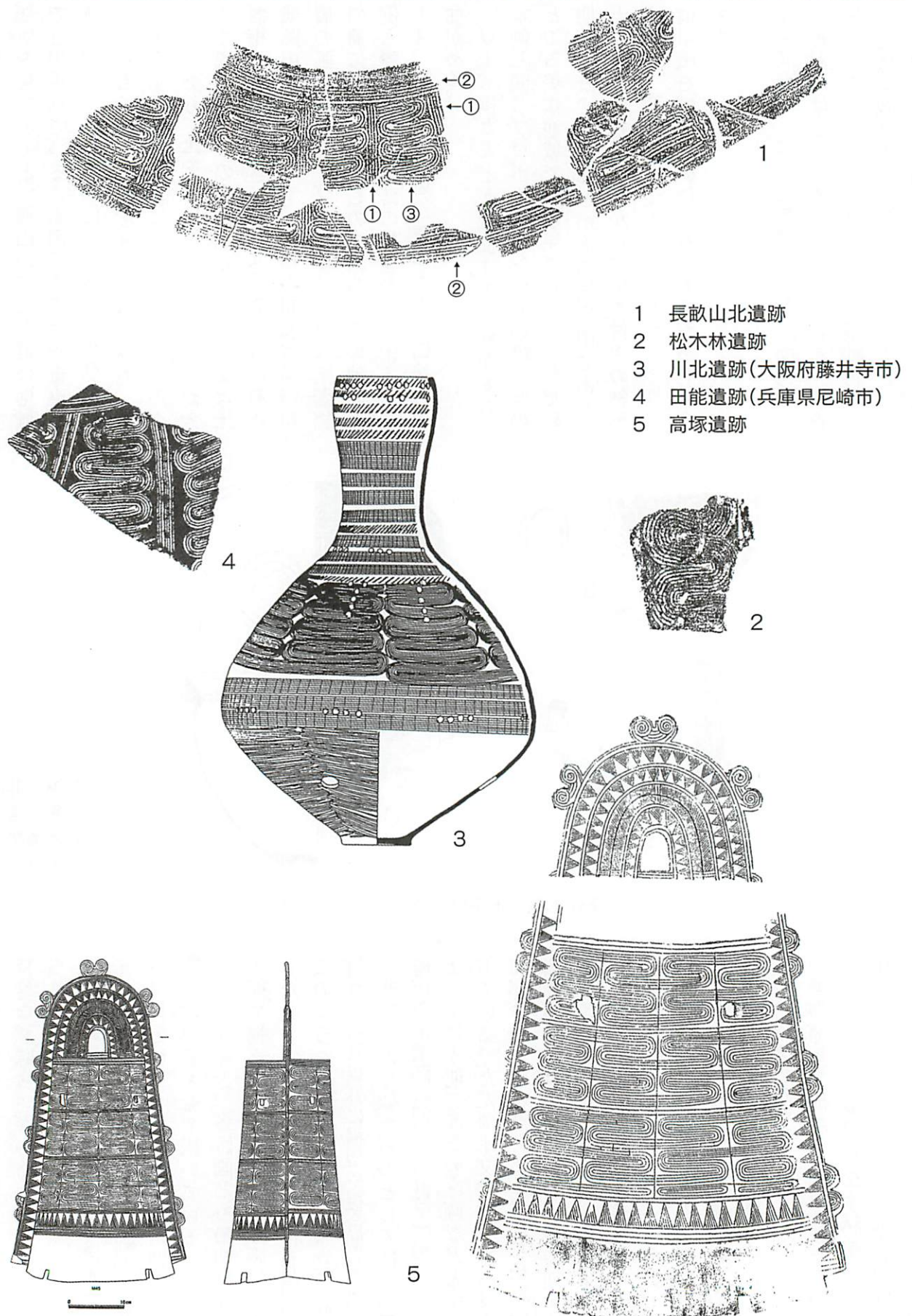


図3 流水文を描く土器と銅鐸 (縮尺不統一)

は明瞭ではないが、長さ10cm程の破片のようで、拓本をよく見ると両サイドに区画線らしきものの痕跡がある。その中に10条ほどのくし状工具で、左右の湾曲部分のみを交互につないで流水文風に描いていることがわかる。湾曲するまでのスパンは短くほとんどないが、基本的な描き方は本例とよく似ているようである。

### 流水文銅鐸との関連について(図6)

次に流水文を施した銅鐸との関連について考えて見たい。流水文銅鐸の類例は岡山市高塚遺跡の出土例(図3-5、註9)がある。これと比較すると銅鐸の方は長いスパンで一筆書き風に区画をまたぐ形で描かれている事がわかる。

銅鐸と本例などとの描き方が若干異なるようであるが、この違いは両者の区画スペースの関係とも思われる。ただ区画を施す事や区画内に流水の湾曲部分が見られるような基本的な描き方は、非常に良く似ていて両者の関連性が指摘できる。

さらに、本例は赤く塗られている。このことは、特異な土器であった可能性が高く、把手付きの鉢形土器自体が、土器棺の類例があることから、特殊な土器として元々作成されている可能性もある。本例はもしかすると銅鐸に変わる祭式用の土器であったのかもしれない。銅鐸の中でも流水文があるのは珍しく、鐸身にあるのは県内では

高塚遺跡を含め2例あるのみである(註10)。いずれも県南地域であるが、本例が区画を施す点などあまりにもリアルに描かれていることから推測すると、銅鐸が埋納された時期と本例の時期が似通っているとも考えられるので、銅鐸を見聞きした人が描いた可能性はさらに高まる。実際に高塚遺跡などの銅鐸を見た人が、土器の製作に関わっているのかもしれない。

### おわりに

把手付きの鉢形土器については、類例から土器棺など特殊な用途として製作されたものが多いこと、さらに土器に描かれた流水文については、畿内地方に同様なものがあるため、そちらからの搬入品の可能性と影響を受け同一の描き方をしている可能性が指摘できる。さらにその描き方から銅鐸の流水文にも関連づけて述べてきた。

美作地方では、勝央町植月北で銅鐸(註11)、真庭市の旧落合町下市瀬で銅鐸形銅製品(註12)がそれぞれ1個ずつ出土する。さらにかつて鏡野町で銅鐸の出土が知られる(註13)。ただ、鏡野町のもは原物が存在しないため詳細は不明であるが、この銅鐸が仮に流水文銅鐸であれば、見聞きした話としては、非常におもしろくなる。今後は土器に見られる流水文については、さらなる類例の増加をまって再度検討したい。

### 註

- (1) 津山市教育委員会1992「長畝山北古墳群」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第45集』行田裕美2020「47長畝山北遺跡」『新修津山市史資料編考古』
- (2) 津山市教育委員会1992「一貫東遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第43集』
- (3) 津山市教育委員会1998「有本遺跡ほか」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第62集』
- (4) 岡山県教育委員会1997「小中遺跡ほか」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告117』
- (5) 寺沢薫・森井貞雄1989「河内地域」『弥生土器の様式と編年近畿1』木耳社
- (6) 佐原真2002「銅鐸の考古学」東京大学出版会
- (7) 尼崎市教育委員会10982「田能遺跡発掘調査報告書」『尼崎市文化財調査報告第15集』
- (8) 近藤義郎2000「鏡野町の弥生時代遺跡・遺物」『鏡野町史考古資料編』
- (9) 岡山県教育委員会2000「高塚遺跡ほか」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告150』
- (10) 吉備郡真備町(現倉敷市)妹で出土した、妹銅鐸がある。東京国立博物館蔵。
- (11) 当館蔵、近藤義郎1951「美作国植月念仏塚出土の銅鐸」『吉備考古83』吉備考古学会
- (12) 岡山県教育委員会1974「下市瀬遺跡ほか」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告3』
- (13) 昭和38年に2個の出土が知られているが、所在は不明である。

## 令和 4 年度特別展記念講演会を開催しました。

11月26日に京都大学大学院文学研究科准教授三宅正浩氏をお招きし、特別展記念講演会を開催しました。「近世中期の藩政改革」と題して、ご研究されてきた徳島藩や松江藩の藩政改革の事例と、康哉が行った藩政改革を比較しながら、近世中期の藩政改革の特質についてお話しされました。約60の方に聴講いただき、盛会のうちに終了することができました。講演会の後、ギャラリートークを行いました。



講演会の様子



講演会後の展示風景

## 諫早市友好交流都市出雲市津山市三市交流展へ 津山市からも資料を出品しました。

津山市の友好交流都市である長崎県諫早市で開催された三市交流展に当館から江戸一目図屏風ほか18点を出品しました。また、記念講演会では、当館学芸員が「津山藩主森家と松平家」と題し講演を行い、諫早市の皆様に津山市の歴史と文化の一端をご紹介できるよい機会となりました。



展示風景（江戸一目図屏風）



記念講演会の様子

## 学芸員実習生を受け入れました。

今年度は、7月28日～8月5日に1人、9月28日～10月6日に2人の計3人の実習生を受け入れました。今年度の実習生である大学生3人は、コロナ禍で対面授業や実習授業が大幅に制限されてきた世代です。当館では、体調管理など感染予防には十分気をつけながら、夏の学習プログラム「勾玉をつくろう」の補助や、写真撮影、目録作成、襖の裏張りをはがしなど大学では体験できなかった作業を行ってもらいました。



学芸員実習の様子

## 中学生の職場体験を行いました。

10月18日から21日の午前中、中学生1名の職場体験を行いました。中学生には、和綴じ修復の体験や、特別展の準備などを手伝ってもらいました。「学芸員」という職業に興味をもっている学生さんだったので、私達も刺激を受け、励まされたような気持ちになりました。

## 勝北中学校で出前授業を行いました。

10月13日に、勝北中学校で津山藩の大名行列図を印刷した巨大な巻物を使った出前授業を行いました。藩主の乗り物や熊毛槍をさがすゲームなどを取り入れながら、自由に行列図を見てもらいました。その後、江戸時代の勝北地域などについても少しだけお話しをしました。少しでも地域の歴史に興味を持ってもらえれば嬉しいです。

## 第125回 文化財めぐり ～中北下地区の文化財をめぐる～

○久米公民館—密厳寺・久米三成4号墳—鴻の池2号墳—津山元標—久米歴史民俗資料館—久米公民館（参加者 10名）

令和4年5月14日（土）津山市内中北下地区の文化財を中心にめぐりました。当日は前日の雨も上がり天候にも恵まれました。久米三成4号墳（国指定史跡・前方後墳）は密厳寺（真言宗）の墓地造成中に箱式石棺が発見され、調査後に保存された古墳です。整備されていて、墳丘上には石棺も復元され、



見学風景

人骨や鏡・勾玉などの副葬品が出土しています。鴻の池2号墳は、横穴式石室をもつ前方後円墳としては珍しく、丘陵上にあるため、急な斜面を登りたどり着きました。この二つの古墳は時期は違いますが、いずれも丘陵の頂部に立地し、平野部を見下ろすことができます。津山元標は明治7年に建てられた道標で、津山城下の大橋西口を基準として、ちょうど西に三里（約12km）の道標になります。最後に久米歴史民俗資料館で久米三成4号墳の鏡など、旧久米町内から出土した遺物を見学し、約5kmの全行程を終了しました。

## 今後の展示予定

12月24日（土）～令和5年1月15日（日）まで、ミニ企画展「お正月」を開催します。

おめでたい七福神を描いた作品やお正月らしい資料を展示する予定です。

その後、1月21日（土）～2月19日（日）は、ミニ企画展「茅葺き職人・山本進さんの仕事（仮）」、2月25日（土）～3月26日（日）は企画展「郷土の刀剣Ⅱ（仮）」を開催する予定にしております。

ぜひ、何度も博物館へ足をお運びくださいませ。

**大** 博物館だより「つはく」  
No.114 令和4年11月30日

**津博**  
TSUJIBOKU

〔編集・発行〕津山郷土博物館  
〒708-0022 岡山県津山市山下92  
Tel (0868) 22-4567  
Fax (0868) 23-9874  
E-mail tsu-haku@tv.t.ne.jp

〔印刷〕二葉

### 入館のご案内

〔開館時間〕午前9:00～午後5:00

〔休館日〕毎週月曜日・祝日の翌日

年末年始（12月29日～1月3日）・その他

〔入館料〕一般…300円

（30人以上の団体の場合240円）

高校・大学生…200円

（30人以上の団体の場合160円）

65歳以上…200円

（30人以上の団体の場合160円）

中学生以下・障害者手帳を提示された方は入館料が無料です